

「生活科指導法基礎」の授業づくりにおける

「信大茂菅ふるさと農場」の意義（1）

土井 進 教育科学講座

キーワード：生活科指導法基礎，信大茂菅ふるさと農場，農作業体験

1. 本稿の目的

本稿の目的は、「生活科指導法基礎」や「社会体験実習」、及び「総合的学習」の教育・研究の場として開拓した「信大茂菅ふるさと農場」（以下「農場」と省略する）の開拓に至るまでの経緯を明らかにすると共に、この「農場」での活動や体験を通して、学生がどのような知見を得ているかを明らかにすることにある。資料としては、学生が記述した小論文を活用し、そこから読み取ることが出来る学生の「気づき」に基づく知見を、「生活科の目的」、「生活科の内容・方法」、そして「生活科の年間指導計画・学習指導」の3つの観点から分類し、それぞれ3事例ずつを取り上げ、最後に総合的な考察を行うことにした。

2. 「信大茂菅ふるさと農場」の開拓に至る経緯

（1）直接的動機

農業に関してははずぶの素人である筆者が「土づくり」による「人づくり」の道を選んだ直接的な契機は、1999年（平成11年）7月に盛岡市で開かれたNHK主催のシンポジウム「土から学ぶ子どもたちの未来」において、パネリストの一人であったシンガーソングライターのイルカさんが、宮沢賢治の詩「稲作挿話」を紹介して下さったことである。それは次のような一節であった。

「これからの本統の勉強はねえ

テニスをしながらかの先生から

義理で教はることでないんだ

きみのやうにさ

吹雪やわづかの仕事のひまで

泣きながら

からだに刻んで行く勉強が

まもなくぐんぐん強い芽を噴いて

どこまでのびるかわからない

それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ」

筆者はこの一節に触れて、自らが一介の小作人となって、学生と共に稲作や畑作に取り組もうと腹を決めたのであった。この道を切り開くことが「生活科指導法基礎」や「社会体験実習」の授業を机上で行うよりもはるかに効果があるに違いないと確信したからである¹⁾。

（2）学部の改組と「信大茂菅ふるさと農場」の開拓

本学部は、1999年度（平成11年度）に「臨床の知」を教育目標とする教育体制に改組され、2000年度（平成12年度）から「総合・生活科教育分野」が新設されることになった。筆者は2000年（平

成 12 年) 10 月 1 日付で、信州大学教育学部附属教育実践総合センターから教育科学講座に移籍し、生活科指導法の授業を本務とすることになった。この時から筆者の授業スタイルは、背広・ネクタイからつなぎの作業服と長靴スタイルへと変わった。そして、この分野の選択必修科目である「社会体験実習」と教職科目である「生活科指導法基礎」の授業づくりを実践することのできる農場を求めた。幸いに JA ながのと長野市茂菅地区の農家林部信造氏のご協力により、教育学部キャンパスから自転車で約 10 分、徒歩約 25 分の長野市茂菅地区に、それまで 6 年間放置されて荒廃地と化していた水田 3 アールと畑 3 アールをお借りすることができた²⁾。ここを開墾して「信大茂菅ふるさと農場」と命名したのは、2000 年(平成 12 年) 3 月 15 日のことであった。「農園」ではなく「農場」としたのは、作物栽培を目的とするのではなく、「土づくり」を通して「人づくり」を実践する「道場」として機能させたかったからである。この農場は JA ながのの計らいによって国際協力田に位置付けられたことにより、アフリカのマリ共和国へここで収穫したお米 60 キログラムを毎年国際救済米として送ることになり、地域での活動が世界へとつながることになった。

(3) 「生活科指導法基礎」における授業づくりの一大転換

筆者は平成 5 年度～8 年度に、「生活科教育法」という授業を 3 コマ分担する機会を得た。これが筆者の生活科との出会いであったが、この時に実施した授業内容は、生活科の年間指導計画の作成、生活科マップの作成、生活科の授業実践例の紹介等の講義であった。このような机上の講義では、学生に生活科に関する知識を与え、優秀なレポートを作成することができる学生を育てることができたとしても、自ら汗を流し、泥まみれになって生活科を実践してみようとする意欲のある学生を育てることはとてもできないと思われた。そこで、生活科を本務とすることになったことを契機として、従来の座学を廃止し、学生とともに田畑に出て様々な活動や体験に取り組み、生活科でこのような力が確かに身についた！生活科の目標の核心はここにある！と実感することができるよう「生活科指導法基礎」の授業を目指して、これまでの指導法に一大転換を図ることにした³⁾。

2000 年度(平成 12 年度) から 2007 年度(平成 19 年度) までに、この「農場」で農作業体験に取り組んだ学生は、「社会体験実習」の授業で 155 名、「生活科指導法基礎」の授業で 986 名、「総合演習」の授業で 29 名、合計 1,170 名である。

3. 2007 年度(平成 19 年度) 前期の「生活科指導法基礎」のシラバス

月曜日の 5 時間目の「生活科指導法基礎 A」の受講者は 44 名、木曜日の 5 時間目の「生活科指導法基礎 B」の受講者も 44 名であった。これらの授業のシラバスとして次のことを掲げた。

(1) 授業のねらい

「農場」(8 年目) における農作業体験に取り組むことを通して、「生活科」の授業が目指す「自立への基礎」を培うための指導法を身につける。

(2) 学生が達成すべき目標

- ① 鍬と鎌の扱い方を身につけ、鎌を研ぐことができるようになること。
- ② 畑や水田での農作業体験に主体的に参加することによって、自然とふれあうことの喜びを体験すること。また、自然体験活動が人間形成にとって重要であることについて自分の考えをまとめることができること。
- ③ 学生同士が農作業体験を共同で行うことによって、人と人がふれあう喜びを体験すること。また、社会体験活動が人間形成にとって重要であることについて自分の考えをまとめることができること。

- ④様々な自然体験や社会体験を通して、自分自身や自分の生活について考えるとともに、学習指導要領を参考にして生活科の2年間にわたる年間指導計画を作成することができること。

(3) 授業内容とその展開

- ①「農場」まで歩いて約25分の道のりを、学生は鍬をもち長靴を履いて、地域社会を観察しながら出かけた。班分けをし、班ごとに畑の土起こし作業をし、畝を作った。
長靴と軍手の置き場所と片づけ方についての説明を聞いた。また、苦土石灰と化学肥料をまいた。
- ②じゃがいもを植える手順の説明を聞き、各班ごとに植えた。
- ③畝の草取り、鍬の使い方の説明を聞き、水田の田起こし作業を行った。
- ④生協食堂から出る生ゴミの堆肥化作業について環境教育の観点からの説明を聞き、各班から順番に堆肥置き場まで一輪車で運ぶ作業を開始した。
- ⑤堆肥となった生ゴミを茂菅の水田と畑に入れることによって、循環型の有機栽培の農業が推進され、自分たちが環境教育を推進していることに充実感と達成感を持てるようにした。
- ⑥雨天のため教室で『小学校学習指導要領解説 生活編』のうち総説、生活科の目標、生活科の内容について講義した。また、班ごとにディスカッションを行った。
- ⑦最初につくった畝にトウモロコシの種を植えた。
- ⑧『小学校学習指導要領解説 生活編』のうち総説、生活科の目標、生活科の内容の範囲の小テストを実施した。
- ⑨じゃがいも畑、トウモロコシ畑の草取りと、田んぼのあぜの草刈りを行った。鎌の切れ味が悪くなると必ず研ぐように指示した。
- ⑩田んぼの代掻きをする前に鍬で畦塗り作業を行った。この活動には茂菅地区の農家林部信造氏とJAながの営農指導部の北沢政美課長のご指導をいただいた。
- ⑪毎回の活動を通して気づいたことをレポート用紙に書いていくことを指示してあったので、それを各班ごとにまとめて発表した。この発表会の時に昨年度の茂菅米を用いた「おむすびをいただく会」を開き、クッキング隊の学生が世話をしてくれた。
- ⑫2年間にわたる生活科の年間指導計画を各班ごとに相談して作成した。
- ⑬各班が作成した2年間の指導計画を発表しあった。
- ⑭「農場」での収穫祭として、じゃがいもとトウモロコシをその場で収穫してゆでて食べた。
- ⑮前期試験として次のテーマで小論文を課した。「生活科の授業づくりの視点からみた「信大茂菅ふるさと農場」の意義について、具体的な「気づき」を踏まえて論述しなさい。

(4) 学生の小論文の分類

学生が記述した小論文を資料として、「農場」での「気づき」に見られる様々な知見を「生活科の目標」「生活科の内容・方法」「生活科の年間指導計画・学習指導」の3つの観点から分類して以下に提示することにしたい。しかし、小論文を3つに分類することは容易なことではない。何故なら『小学校学習移動要領解説 生活編』に次のように述べられているように3つのことは密接に関連しているからである。すなわち「具体的な活動や体験は、目標に示されているだけでなく、内容にも示されている。このことは具体的な活動や体験が単なる手段や方法ではなく、目標でもあり、内容でもあることを意味している。言い換えれば具体的な活動や体験は、目標でありながら、内容であり、さらに方法でもあるということである。このことは、すでに経験的に理解されていることである」。⁴⁾したがって以下に取り上げた9つの事例の分類は厳密なものではなく筆者の判断による分類であることをお断りしておかなければならない。なお、小論文の掲載に当たっては9名の学生の上承を得た。

4. 学生の「気づき」にみる「生活科の目標」に関する知見

(1) 生きる力—言葉だけでは学ぶことができないもの— (保健体育教育分野 3年 井出竜也)

「農場」の意義は、「生きる力」の育成であるといえよう。この「農場」での直接体験が、人、社会、自然について様々に感じ、それらについて関心を生み出し、自分自身の生活や自立へもつながると考えられる。私が「生きる力」の育成であると捉える根拠は3つある。

1つ目は、人と接するということにある。「農場」で活動するに当たってグループをつくったが、そのグループで協力して前期分の授業を行ってきた。じゃがいもの種芋を植えるという活動。班の畝を作るという活動。じゃがいもやトウモロコシを収穫するという活動。これらの全ての活動を共に行うことによって、自他の存在に気づき、自分自身について考え、他人について考えるきっかけとなる。

“グループのみんなは一生懸命活動しているなあ、自分も一生懸命やらずにちゃ”といった気づきが「生きる力」を育成するにあたっての第一歩であると思う。また、これらの活動を通して見られる児童たちの情緒的な交流も同じであるといえよう。

2つ目は、社会の一員であるという自覚である。土地を借りて農作物を育てたり、地域の人が田の畦塗り作業の指導に来て下さったり、収穫したお米を国際協力田としてアフリカのマリ共和国に送ったりすることによって、自分自身が身近な地域社会の人や外国の人と関わっているということに気づくことで、自分も社会の一員であるという自覚が生まれる。それは、地域の生活や児童の生活に根ざしていれば根ざしているほど、この気づきは大きなものになり、自覚もしやすくなる。また、「農場」への通り道においても安全に畑まで行くことができるための社会的な配慮というものが道のあちこちにあることに気づくことができるので、そこからまた社会へ目を向けることができる。

3つ目は、自然に触れる、自然に気づくことにある。ヒトは地球という自然の中で生きている動物の一種である。他の動物と共存するという事に気づくきっかけがこの「農場」にある。雨で「農場」へ行けなかったこと、途中で雨が降ってきたこと、月が移り変わって行くに連れて気候や景色が変わっていくというところから自然へと目を向ける気づきが生まれる。さらには、農作物や雑草の生長や活動の前後の心の変化が自分の成長への気づきをもたらし、「生きる力」の育成へとつながっていくであろうと想像することができる。

この3つの根拠は互いに交わり合い、混在することで人間は感動を味わい、自他の成長に気づくことができる。そして、「気づく」ということは、まわりに目を向け、体を向け、心を向けて、自分の心から発信しているということである。3つの根拠が絡み合い、情意的な好きになる、楽しいといった心の在り様に変化していくことで、「生きる力」が育成されていくのだと捉えることができる。「農場」という場所で農作物を育てるという活動を通して直接体験し、社会や自然をも含む自他に気づくことによって、内から「生きる力」が育成されていく。この農場のもつ意義は、人が言葉だけでは教えることができない「生きる力」を学ぶところであるとまとめることができる。

(2) 文字からでは学べないモノを学んで (数学教育分野 2年 若林わかば)

私は正直、生活科とは小学校1・2年生は、社会や理科がまだできないから、その穴埋めのために取り入れられているものだと思っていた。しかし、この授業を受けてそのイメージが一変した。それには大きな理由がある。「農場」で毎週野菜や畑の周りに生えている雑草の成長に、忘れかけていた“何か”を思い出すことができたからである。“何か”が何なのか、うまく言葉には表現できないが、植物が本当に生きているということを実感できたことなどであると思う。

私は、毎週「農場」へ通う中で植物の成長が本当に早いことを知った。生きているのだから成長するのは当然だし、成長が早いのだって収穫時期と種まきの時期から考えればわかりきったことである。

しかし、実際に種をまき、芽が出たのを確認して、実を付けるまでを観察していると、やはり本など文字から取り入れる知識とは違い、様々なことを実感を持って学ぶことができた。例えば野菜を育てる過程を学んだことは当然として、自然のありがたみや植物の生命力である。私が今回の授業で自然のありがたみについて最も感じたのは、じゃがいもの収穫の時だ。種いもとして半分に切ったあれっぼっちのじゃがいもから大小様々な十数個のじゃがいもが獲れた。その時に種いもを育ててくれた土や雨、土を育ててくれた微生物、そして、じゃがいもの葉を育ててくれた太陽など、すべてのものに感謝をする気持ちになった。そして私たち人間は、結局草取りくらいしかできないのにじゃがいもを食べていて、少し申し分ない気持ちになった。また私が植物の生命力について最も感じたのは、かぼちゃの成長を見たときである。私の班はかぼちゃを育てることにした。しかし、種を買ったとき袋の裏に書いてあった栽培方法には「黒いビニールをかぶせて」などと書いてあった。私たちには黒いビニールがなかったのでかぼちゃが芽を出してくれるか、ちゃんと大きく育ってくれるかがとても不安だった。しかし、私のそんな不安をよそにかぼちゃはすくすく成長し、ついにはトウモロコシ畑にまで及んでいた。それを見たときに私は植物は生命力にあふれていることを実感した。売っているほとんどの野菜は農薬が使われたり、ビニールハウスで栽培されているが、実際はそんなものがなくても良い土と良い環境があれば植物の生命力だけで育ってくれることを実感した。

私はこの「農場」で多くの気づきを得て、たくさんのことを感じた。生活科の授業が小学校1、2年生で必要なのは、私が今回感じたようなことを感じ、給食のときに「いただきます」「ごちそうさまでした」を言う習慣を身につけさせたりするためだと思った。生活科の授業を行う教師が、自然や食物のありがたみを感じることができていないようでは、子どもたちが自然や食物にありがたみを感じることはできないと思う。そのためこの「農場」は、生活科を教えるに当たり必要な考え方を文字ではなく実体験を通して教えてくれるので、とても重要な意義を有していると思う。

(3) 人の生活は畑を耕すことから始まったことを考えさせられた授業（障害児教育分野2年 神崎佑一）

私は講義室で机に向かって座り、ノートをとるような授業形態はあまり好まない。それで体を動かしそうなこの授業を受けようと思いました。この授業では実に深く学ばせて頂いたことが数多くありました。最初の授業ではじゃがいもを栽培することでした。ところがその下準備はかなりの労力を必要とし、土の耕し、肥料播き、雑草ぬき、畝づくりと日本昔話にでてくるようなおじいさんとおばあさんの絵で、おじいさんが畑を耕しているイメージがあるのですが、あんな易しいものではないと思い知らされました。そして北海道産のじゃがいもを使い、芽を残すようにして半分に切り、30 cm間隔に植えました。収穫の時には雑草がまた生い茂っており、植物の生命の強さには驚かされました。じゃがいもを収穫する際、茎を引っ張っていくと、大きなゴロゴロとしたじゃがいもが出てきて、「これがいわゆる芋づる式かあー」と思いました。収穫したじゃがいもを塩でゆでてみんなで食べたのですが、塩でゆでたはずなのに甘味がありとてもおいしかったです。水と土と光でしか育っていないはずのじゃがいもですが、なぜこれほどまでにおいしいのか、植物の生命の恩恵にあずかった気がしました。じゃがいもは種ではなく種いもから芽が出て来ることに、不思議さとおもしろさを感じました。

稲を作るための水田づくりもかなりの体力を必要としました。植物を育てる環境の整備の大変さを改めて痛感しました。草刈りでは長靴が埋まってしまうのではないかと思うぐらいの深さで、雑草の根の力強さは腰が痛くなるほどでした。

この「農場」は、隣に旭山があり、春から夏にかけての山の木々の緑が生い茂っていく姿を見るたびに、自然の雄大さを思いました。これが夏が終わり、秋、冬へとなれば、紅葉から葉が散るまでの

移り変わりを楽しむことができるのではないか、などということを考えながら友だちと協力して作業していると、時間があっという間に過ぎてしまいました。

力仕事を通して新しい仲間と出会い、植物の生命の力強さと成長を感じることによって、自分自身の成長も感じとることができたと思います。畑を耕すことで「公共施設の利用」、「人と人との相互関係のつながり」、畑作りから収穫までの具体的な体験を通して「自分と身近な人々や自然との交流」、「生活を営む上で必要な習慣、技能、知識の習得」、さらには「自分が成長してきたことへの感謝の気持ち」を培う」という生活科の教科目標を達成する上で、この授業はまさにその通りを狙った内容であったと思います。4ヶ月という短い期間だったので生活科の内容の8項目や学年目標の全てを関わらせることはできなかったと思いますが、長いスタンスで見れば畑仕事というのは、地域社会の円滑材として大きな役割を果たす大切なものなのだと思います。人とのコミュニケーション、自らの考えによる行動、季節の変化、食料を栽培することの大切さ等、人が生きていく上での総てが詰まっているのだと、この授業を終えて考えさせられました。

5. 学生の「気づき」に見る「生活科の内容・方法」に関する知見

(1) 茂菅が関与する生活科―「気づき」を踏まえて―(音楽教育分野2年 林小百合)

生活科の授業づくりをするにあたってポイントとなる内容は8項目である。「農場」は、それら8項目の必要事項を全てクリアできる存在であると分かった。先ず第1に、「学校と生活」についての内容である。児童は学校での友達とのふれあいを通して、集団の中での自分の行動の仕方などを学ぶ。茂菅では班ごとに分担し、自分たちで育てる農作物を決定し、実行し、役割分担をした。このような方法は学校生活で大いに役立つことで、子どもたちは集団での協調性などの能力を身につけることができる。

第2は「地域と生活」という内容である。茂菅での水田の畦塗り作業において、地域の「農業の達人」2名から私たちは鍬の使い方や畦塗りの仕方を教わった。こうして地域の人々と関わっていくことは、子どもたちにとっても貴重な出会いである。第3は「家庭と生活」であるが、茂菅での農作業体験を通して修得した作物の育て方、食物の大切さを家庭内で話し合うことによって、母への感謝も生まれ、さらには家庭でも作物を育てようとするとも考えられる。学校で学んだことを実践的に家庭生活に即座に取り入れることができるのは生活科の長所といえよう。第4は、「季節の変化と生活」である。今回私たちが経験したのは春から夏にかけての4ヶ月であったが、年間を通して茂菅で活動すると四季の季節感が味わえると思う。私たちが経験した期間でも、「天候の変化」や「季節限定の植物」など、季節の変化が表象された自然と多く出会うことができた。茂菅に着いて作業しているときはとても良く晴れていたのに、途中から嵐となり作業中止というハプニングも経験した。自然というものは人工と対比して、いつも思い通りに行くことはありえない。何が起こるか予測不可能であることを学んだ。これは自分自身の人生とも同様に考えることができ、自然からの教えをいただいた。第5は、「自然やものを使った遊び」である。茂菅を通して一番多く学んだことはこの自然の中での遊びであった。機器的なものやメディアがない茂菅で活動しながら生み出した遊びは、「四つ葉のクローバー探し」、「草ずもう」、「土で山作り」、そして、「雑草の長さ比べ」などの即興でできあがった遊びであった。これらの遊びを生み出すことはアイデアや想像力を刺激し、子どもたちに自然との親しみを感じさせることになると思う。第6は、「公共物と公共施設の利用」である。茂菅農場に限らず、他の施設で活動させてもらったり、見学させてもらったりする際に、先方の施設へ連絡したり施設の使用法を学ぶことによって、社会のルールを学ぶことができる。第7は、「動植物の飼育・栽培」という最

も茂菅が重んじている事項である。今回私たちはじゃがいも、トウモロコシ、稲の栽培を経験したが、子どもたちには動物（鶏、牛など）や植物（ヒマワリ、ヘチマなど）を育てるのも良いと思う。私は茂菅で食物の栽培をしたことで、食物への興味・関心が強まり、食物の尊さを学んだ。「命」は野菜や、野菜に付いている小さな虫にも、一つひとつあるもので、みんな平等であり、本当に尊いものだと感じた。動植物の飼育・栽培は、生活科の原点を学ぶことが可能であると思うので、子どもたちに最も学んで欲しい事項だと思った。

最後に第8は、「自分の成長」である。私は茂菅で「気づき」をメモするたびに、自分が成長していくことが感じられた。少しずつではあるが、今まで知らなかったことを知り、それらは人生ともつながってくるのが分かった。一番心に残っているのは田の畦塗りであった。地域の農家先生に教えてもらいながら、土を一旦ドロドロにして、鍬で壁を塗るようにして畦づくりを行った。ドロドロにした土は乾燥すると固まり、強くなり、水田を守る。「雨降って、地固まる」とはこのことをいうのか、と目からウロコの気分であった。自然の強さは自分の心に伝わり、茂菅農場で多くの体験ができて本当に良かったと思った。「感謝」という言葉を学ぶことができる授業でした。

（2）生活科の教科目標と内容8項目の達成（障害児教育分野2年 古野友理）

「農場」は生活科においての教科目標を達成することに適した場であった。「具体的な活動や体験」については、実際に鍬を持ち、畑を耕すことから始まり、野菜を植えたり、草抜きをすることで、普段の学校生活ではできない体験をすることができた。これらを通して「自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心」を持つこともできた。田の畦塗りを教えて下さった地域の方や茂菅に行くまでの風景の変化、前期の間の季節の変化などに関心が向くようになった。具体的には、他の畑で作業をしている人たちにあいさつが普通にできるようになったり、小さな虫を見つけては春や夏を感じ、野菜の育つ時期やそれに伴った虫の成長などに気づき、興味を持って作業ができるようになった。「自分自身が自分の生活について考える」ことについては、野菜を育てることでその大変さを知り、普段の自分自身の生活での食物の扱い方を考え直すことができた。また、茂菅に行くまでに原付バイク、自転車、徒歩という手段があったが、自転車や徒歩で行くことによって、昔の人の生活を考え、自分たちの今の生活がどれだけ便利かということについても考えさせられた。「生活上必要な習慣や技能を身につける」という項目では、まずはあいさつができるようになったことだと思う。何事もあいさつから、どんなに苦手な人と話すときでも、あいさつがきちんとできれば少しは気が楽になるし、他人も気持ちが良い。目標の最後の「自立への基礎」を養うには上述のことを通して、たくさんの気づきを経験し、それについて考えていくことで自分の生活に責任をもてるようにすればよいと思った。私は実際に茂菅では、大変だったこと、楽しかったことが沢山あり、自分を見直すチャンスも多くあったので、少しではあるが成長できたと思う。

また、教科目標を前提とした内容8項目についても「農場」は有意義であった。動物の飼育は「農場」ではできなかったが、畑の周りで鳥などの動物に気づくことができた。「農場」の側を流れる裾花川で魚や虫を捕り、飼育するというのも考えられる。「農場」の存在意義としては、生活科の目標や内容についての項目の一部分だけではなく、多くの項目を達成できる場であったといえる。そのなかでも特に達成できたのは、自然と自分との関わりであったと思う。雑草と野菜の区別にとまどったり、カエルやアメンボ、ミミズやバッタを追いかけたり、苦手だと思っていた虫や草が意外とおもしろくてはしゃいでしまった。

授業でこの気持ちの変化を生かすには、他の児童との関わりを持ち、気持ちを共有することによって新たな遊びや気づきへとつなげていくことだと思う。茂菅には単に野菜を育てる場としてではなく、

児童の成長を導く様々な要素が存在している。これらをうまく結びつけ、指導していくことで、2年間しかない生活科の授業が内容の濃いものになるだろう。茂菅でたくさんの発見ができてとても良い経験になった。

(3) 生命の力強さ (国語教育分野 2年 後藤 愛)

「農場」での授業は様々なことを私に教えてくれた。生活科の授業として見ても、生活科の内容8項目の中の「地域と生活」「公共物や公共施設の利用」「季節の変化と生活」「動植物の飼育・栽培」「自己の成長」の5項目に大きく関わった授業であったと考える。次に私の具体的な気づきや感想を踏まえながら本論を掘り下げていきたい。

小学校以来の農作業ということもあり、最初の農作業は戸惑うことばかりであった。5月14日の作業では、田んぼの土を耕したが、初めはなかなか要領が掴めず土を上手く掘り起こすことができなかった。しかし、上手な人にコツを教わったり一緒に作業していくうちに、思い切り鍬を振り下ろした方が上手くいくことが分かってきた。また、1回目の時には見られなかったカエルが跳んでいるのを発見し、初夏の情趣を感じた。この気づきから「季節の変化と生活」を学ぶことができると思う。

また、じゃがいもやトウモロコシの種を植えたとき、「こんなに小さい種いもや種からちゃんとしたじゃがいもやトウモロコシはできるのかな」と思った。しかし、一週間後に畑へ行くと既に茎や葉が出ていてとても驚いた。また、じゃがいもの花を初めて見て感動した。じゃがいもやトウモロコシの成長からも生命の力強さを感じ取ることが出来たが、雑草からもそれは十分に感じ取ることが出来た。毎回草取りがとても大変であったからだ。除草剤をまけば雑草も生えないかもしれないが、それでは意味がないだろうなと思った。草取りをしていくうちに、この草たちも命いっぱい成長しているのだと思った。このような作業をしているからこそ生じた感情である。収穫の時やみんなでじゃがいもパーティーをした時は本当に感激した。じゃがいもの収穫では2畝で50個ほどのじゃがいもが採れた。自分たちで育てたじゃがいもの味は格別であった。すそ分けすると家族や友人にも喜ばれた。

今回の作業を通して、じゃがいも、トウモロコシ、雑草と共に自分が成長できたと思う。生命の力強さが手に取るように分かったことが一番の理由だ。農作業に対する意識も、食物に対する認識も、今回の授業で大きく変化した。このことこそが「農場」の最たる意義ではないかと私は思う。今回学んだこと、感じたことは非常に貴重なものであった。「農場」で学んだことを児童・生徒に還元できるように、これから日々精進し、立派な教師になりたいと思う。

6. 学生の「気づき」に見る「生活科の年間指導計画・学習指導」に関する知見

(1) 「農場」で授業することによって児童につけさせたい気づきについて (音楽教育分野 2年 柳澤 宏美)

前期の間、「農場」では主に大学生として活動し、多くのことを学んだ。このことを授業を行う立場になったら、私は指導者としてどのような活動で、子どもたちにどのような力をつけることができるか。まず、茂菅農場は学校から少し離れたところにあり、歩いて行かなければならない。この茂菅農場に着くまでの道でも、児童は「車がたくさん通っているから、気をつけて歩かなければいけない」「今、友だちとおしゃべりに夢中になったら、友だちも危ないな」など色々なことを考えていると思う。これは、生活科の目標に掲げられている「生活上必要な習慣を身につける」の中の安全を考えることに沿っていると思う。また、具体的視点の「公共物の意識とマナーを身につける」にもつながってくる。他にも児童は、この道のりの間、季節の変化に気づいたり、様々な発見をしながら歩いている。教師は児童の安全に十分注意しながら、自然や季節の変化への気づきを促したり、児童の気づき

を取り上げて、興味・関心を伸ばすのが良いと思う。

次に茂菅農場での活動である。ここでじゃがいも、トウモロコシ、稲などを栽培することによってつきたい力は2つである。第一に、児童が「できるようになった」という自分の成長に気づくことである。おそらく今の子どもたちは、鎌や鍬の使い方、畝の作り方など初めてやることばかりだと思う。教師は指導や補助はするが、子どもたちはそこから「どうしたら安全にできるか」「どうしたら効率的にできるか」などを創意工夫する。この創意工夫は結果となって児童に返ってくるものだから、児童は「自分の工夫によってできるようになった」と自信をもつことができる。また、得意とすることを増やし、生活技能の向上も図ることができる。しかし、この活動の中で一人ではわからないこと、仲間と一緒にないと達成できないことが出てくる。その時、仲間同士で教え合ったり、助け合うことで「集団生活の大切さ」「集団の中での自分の存在」に気づくことができる。問題解決の場面でなくても「交代で水やり当番をする」などの活動で集団活動の大切さに気づくことも可能である。また、「○○ができない」ことに気づくことも、これからできるようになろうという意識につながる。

第二に、地域の人々との関わりをもつことで地域に愛着を持ち、地域の人々に感謝することができるようになる。前期の授業では田んぼの畦塗り作業の時に地域の方々に指導していただいた。このようなゲストティーチャーを授業に取り入れ、「あいさつ・返事」「目上の人への接し方」も身につけさせたい力である。

最後に教室での活動である。教室では植物の成長記録をつける。栽培の問題点を話し合う。収穫したものをみんなで味わうなどの活動が考えられる。これらの活動を通して自己の成長に喜びを感じたり、新たな発見・工夫などができると思う。私が特にここで取り上げたいのは、食の大切さを理解させ、感謝の心を持たせることである。現在、食育の必要性が叫ばれているが、作物を自分で育て、大変さや喜びを感じる事が一番の感謝の心につながる方法であると思う。食育の分野とも関連させた授業を生活科で作りたいと思う。私は茂菅農場でたくさんの気づきができたと実感している。今度指導する立場に立ったら、子どもにこのような体験的学習を実施したいと思う。

(2) 茂菅農場での活動のすばらしい点 (情報技術分野2年 福呂 匠)

「農場」で農業を行うことは生活科の授業としての視点から見ると良いと思える点が数多くある。まず最初に自分たちで作物を作る点である。今の子は街で暮らしているので、まず畑仕事なんてしない。私がそうだったように畑を理想の状態に維持しつづけることの大変さなんて知らないだろう。自分で鍬をもち、耕し、草を抜き、自分たちの食べる物がどれほどの手間をかけているかわかるだろう。そして、育てた先にはきちんと実がなってくれる。力を入れた分だけ土と作物は応えてくれるのである。このことはどんな子にも何かしら感動を与えるだろう。

私はこの授業で初めて畑仕事をしたが、作物の成長や旬、上手に育てる方法などに興味を持つとは思わなかった。作物の成長とともに自分も成長したようである。次に自分で作ったものを食べるという点である。自分で育てた作物はまた特別な味がするものである。特に今は大量消費の飽食社会である。それは輸入に頼ったかりそめのものでしかないのに、人は食べ物をゴミのように扱う。自分で作ったものならばそうそう粗末にはできないだろう。また、食べ物の自然の姿を見ることができる。私は今年になって初めてピーマンやオクラの実の生え方を知った。そんな子が多いのではないだろうか。実際に魚を売られている切り身でしか見たことがなく、絵が描けない子がいると聞く。そのような子に生物のそのままの姿を見せるのは教育上とても良いことである。

3つ目に健康な田舎の風景、日本の原風景を感じられることにある。茂菅農場は旭山と裾花川が隣にあるとても豊かな場所である。雑草として刈ってしまうことが多いが、様々な作物が生い茂り畦の

斜面を見ればトカゲがいて、田を見ればドジョウやカエル、カブトエビなどがいて、草むらを見ればバッタやイナゴ、クモがあふれている。土を掘ればミミズがいて、空を見れば鳥もいる。こんなに沢山の生物を一度に見ることはないんじゃないかというくらい生き物とふれあえる。これと比べると町は無機質で人しかいないことが不快に感じられる。そんな「農場」で活動することは人の魂を開放させるだろう。生き生きとした子どもが育つ良い環境となっている。

最後に、農業をすることは自然と触れあうだけでなく、地域の人々とつながりができる点にある。「農場」に行くまでにあいさつする人々、隣の畑のおばあさん、見たこともない田植えをした子どもたち。みんな巡り巡ってつながり社会の一員となる。人は一人では生きて行けない。社会の中で支え合って生きていくものである。地域の形成はこうして始まる。こんなすてきな循環があってどうして悪い子が育つだろうか。いや育つわけがない。人と人とのつながりは豊かで幸福な人生を送るための糧である。茂菅農場での活動はそんなつながりを生んでくれる。

上に述べたことはどれも幸せな人生を送るのに重要なことで、生活科の授業内容とも合致する。まさに「農場」での活動は人生の糧の宝庫である。教育の最も根源に在るものは、その人が今後幸せな生活を送るためにあると私は考える。こんな素敵な活動は今後も続いていくべきである。

(3) 自分の成長を感じ取ることができた体験的学習(社会科教育分野 山本琢人)

私たち5班は指導計画において2年間を通しての稲作を計画した。これは「農場」の影響が私の中ではとても大きかったからである。茂菅での経験と気づきから学んだことと計画との関係を述べたいと思う。

春、茂菅農場に初めて行った時、まず鍬を持って自分の手で畑を耕すという作業を行った。小学校の授業の時に鍬を握って以来の経験だったので、すごく新鮮な気持ちだった。児童も初めて鍬を握ったときはこんな新鮮な気持ちを味わうんだろうなと想像した。「農場」では実に様々な体験をした。じゃがいもとトウモロコシを植え、その成長を見守る。また、水田作りのための準備や、刈っても刈っても生えてくる草の刈り取り作業も経験した。

私はこれらの経験から「農場」における学びは以下のようなものがあると考えます。まず第一として地域の人との関わりである。畑にゆくまでの道のりでは地元の人が「茂菅に行くの?」と声をかけてくれた。私は「農場」はこれまでの良き伝統の上に成り立っており、地域の人々に支えられて存在しているんだなと、この言葉を聞いて感じた。また、田の畦塗り際には地元の林部信造さんとJAながのの北沢政美課長さんのご指導のおかげで上手くはできなかったが畦塗りを完成させることができた。

第二に季節の変化である。4月当初は5限の終わりには暗かったのが、夏に近づくに連れて日が長くなった。また、周りの山はいつの間にか深緑へと変わっていた。第三に栽培である。じゃがいもやトウモロコシを育てることによって、その変化や成長の様子に気づき、またそれらは命を持っているということを悟ることができた。第四に自然の物を使う遊びである。私は作業の間に友だちとナズナで遊んだり、カラスノエンドウで遊んだりした。大学生であるが純粋にそれを楽しむことができた。第五に自分の成長である。作物の成長を見ると共に自分の成長も感じることもできた。また、鍬や鎌の使い方など新たな技術を得ることができた。

このような学びから私は指導計画において稲作を計画した。この理由としては以下のものがある。第一に私が稲作を通して体験した学びや気づきを児童にもしてもらいたいからである。前述したとおり「農場」から学び取れたことは非常に多くあった。みんなで一つの作業をし、新鮮な気づき、感動、驚きを味わって欲しい。第二に農場で2年間同じ作業をすることによって、1年目には気づかなかったものに気づき、自分の成長を踏まえながら主体的に行動して欲しいからである。第三に自分の育て

たものを食べる喜び、感謝の気持ちを学ぶことである。自分で働き、自分の手で収穫したものを食べることによって達成感を得たり、そこに至るまでに支えてくれた人たちに感謝する心を養うこともできる。

「農場」での体験は以上のようなことを私に考えさせた。大学生の私でもこれだけ新たな発見、感動があったのだから、純粋な児童はより多くのことを学び、吸収し、大きく成長するだろう。地域に根ざし、地域の人々に支えられながら生きていくことの大切さ、季節の変化を敏感に感じ取れる豊かな感受性、飼育・栽培を通しての優しい心、命あるものを思いやる心、そして、これらを総括した自分の成長。こういうものを茂菅は与えてくれる。生活科の授業はこうした自分の成長をとらえられる非常に大切な役割をもっていると私は感じた。

7. 「人づくり」のための「土づくり」

上述の学生たちの小論文にみられるように、学生たちは「農場」での活動や体験を通して生活科に関する実に様々な学びを修得していることがわかる。机上の講義だけではとても達成することの出来なかつた学びを学生たちが体得してくれていることに筆者は大きな喜びと深い感動の念を禁じ得ない。

「農場」を開拓して本当に良かったと思う充実感で一杯である。また、学生の心に一番深く刻まれている体験は、茂菅地区の農家林部信造氏と JA ながの営農指導課長北沢政美氏による畦塗り作業であったことが分かる。このことから生活科におけるゲストティーチャー⁵⁾の重要性がわかる。農業一筋に生きてこられた地域の方々のご指導が学生の心に深い感動として刻まれているのである。また「農場」自体もこのの方々のご指導とご協力がなかったら、とても今年8年目を迎えることは出来なかつたと思う。協力者の方々への心からの感謝の念を捧げたいと思う。

長靴を履いて鋤をかつぎ、鎌をもって農場へ出かけて農作業に励むという活動は、今日の生活様式からは遠く離れたことであり、時代遅れであるとさえいえる。しかし、敢えてこのことに取り組むのは、学生たちが将来小学校に勤務することになったとき、労を厭わずに子どもたちと手作りの農作業体験に取り組むきっかけになればという願いがあるからである。一度でもいいから農作業体験に取り組み、「土づくり」を経験しておくことが「人づくり」につながるに違いないと信ずるからである。

謝辞

本稿では、学生の学びの事実を通して「生活科指導法基礎」の授業づくりにおける「信大茂菅ふるさと農場」の意義を明らかにしたいと考えた。この願いに対して、貴重な小論文を本稿に引用させて頂くことに快諾を与えてくれた信州大学教育学部の山本琢人、福呂 匠、古野友理、若林わかば、井出竜也、柳澤宏美、林小百合、後藤 愛、神崎佑一の9名の学生諸君に衷心より御礼申しあげます。

参考文献

- 1) 土井進「体験力を育てる農業学習—信大茂菅ふるさと農場における実践—」『教育展望』通巻 557 号 pp.24-31 教育調査研究所 2005 年
- 2) 土井進「「信大茂菅ふるさと農場」と「信大牟礼ふるさと農場」の創設—「生活科」と「総合的な学習の時間」の研究開発をめざして—」『信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』pp.211-215 信州大学教育学部 2001 年
- 3) 土井進 「学生が生活科の目標の核心にふれる大学での体験的授業をめざして」『信州の生活科実践誌 ふるさとの大 地』7 信濃教育会 pp.6-7 2004 年
- 4) 文部省『小学校学習指導要領 生活編』p.24 日本文教出版株式会社 1999 年

- 5) 土井進「ゲストティーチャーに学ぶ生活科」佐島群巳・奥井智久編『新訂 生活科授業研究』 pp.199-204 教育出版
2001年

(2007年12月10日 受理)